

教職大学院 News Letter 協創

にいがた教育フォーラム 2018 in July

第7号

特集「授業」vol. 5

2018.10.1

Since2016



(写真) にいがた教育フォーラム (7/28) シンポジウム

教育学研究科のさらなる発展を目指して

教育学研究科長 宮菌 衛



新潟大学教育学研究科では、平成 28 年 4 月 1 日に専門職学位課程（教育実践開発専攻）を設置し、教職大学院をスタートさせました。この 2 年間は、小久保美子専攻長のリーダーシップの下、教育委員会・学校との連携を深め、教職大学院の礎を築いた時期でした。この 3 月末には、17 名の第一期修了生を送り出すことができました。

その教育学研究科では、平成 29 年度末をもって修士課程を廃止し、今年度から教育実践開発専攻単独の教育学研究科（教職大学院）として再出発しました。このため 4 月から、教育学研究科長を務めさせて戴いております。よろしく御願い申し上げます。

教職大学院制度のスタートから 10 年が経過し、この平成 30 年度にはほぼ全ての都道府県に 54 の教職大学院(国立 47、私立 7)が設置されるに至りました。教職大学院には、地域の学校や社会のニーズに対応して、高度専門職としての教員の養成・研修に関わって、これまで以上に大きな役割が求められています。

その中で本学の教職大学院では、平成 31 年度の拡充を文部科学省に申請中であり、この 8 月に「設置可」の通知を戴きました。拡充の主な内容は、教育委員会等の社会のニーズを踏まえて、新たなコースの拡充と入学定員の増加、そして「教育実践学研究科」への名称変更です。

理論と実践を往還する学びの場を、教職大学院の教員・院生と共に創造する営みにエネルギーを注ぐ所存です。

にいがた教育フォーラム シンポジウム *Symposium*



「育成指標」の原点を踏まえて

コーディネーター
新潟大学副学長
小久保美子

育成指標をテーマに掲げた理由は、公表のタイミングで、指標の根本的な意義をフォーラムの場で是非とも共有したいと考えたからです。

法令文書の中で私が特に着目したのは、策定時の留意事項にある「指標は、画一的な教員像を求めるものではなく、全教員に求められる基礎的、基本的な資質能力を確保し、各教員の長所や個性の伸長を図るものとする。」そして、策定の指針にある「およそすべての教員は、教育を受ける子供達の人格の完成を目指し、その資質の向上を促すという非常に重要な職責を担っている高度専門職業人であり、学校の成否は、教員の資質によるところが極めて大きい。」という文言です。何と重たい文言でしょうか。今こそ、一人一人の教員が指標策定の原点をしっかりと踏まえ、生涯学び続けていく姿勢をもつことが求められています。すべては目の前の子供たちのために、そして豊かな未来のために…



「学び続ける教師」を支えるための 教職大学院・学部・教育委員会の連携の可能性

シンポジスト
新潟大学大学院教育学研究科
研究科長 宮 蘭 衛

平成 29 年度に公表された教育委員会の「育成指標」によって、教員の養成・採用・研修の視点から教職大学院・学部・教育委員会の連携を深めるチャンスが一層高まっています。中でも教職大学院には「育成指標」を手掛かりにして、これら 3 者相互の連携・協働を深めことにより「学び続ける教師」を支える研修システムの構築が今日求められています。

本シンポジウムにおいては、「有識者会議報告書」(H. 29. 8. 29)を参考にして、教職大学院における研修システム像を示し、その研修システムによって教員一人一人のニーズ・課題に応える、多様なキャリア形成・コース

を支えることが可能になることを、提案・主張しました。そして、研修のための連携システムの具体化に向けた検討が今こそ必要であることを強く実感しました。



教員の学ぶ心に火を 灯すために シンポジスト 新潟県教育庁義務教育課 参事 阿部 勉 様

「教員は現場で育つ」と言われますが、日々の業務に追われる中、ともすると自分の目指す教員としての姿を見失い、ひたすら業務をこなし続けるということになってしまうこともあります。そうならないためにも、理想とする教師像や具体的な目標をもつことが大切だと思います。「成長する子どもと共に、学ぶ続ける教員でありたい」そんな願いをもつ教員の道標として、新潟県教員等育成指標を積極的に活用し、日々の業務と結びつけながら、自らを成長させてほしい。

指標をもとに具体的な目標をもって業務に当たるとともに、最新の教育方法等実践をおして学び、教員としての資質を高めるために、教職大学院の存在はとても有意義です。

「養成→採用→研修」というサイクルの中で、「もっと学びたい」「もっと力量を付けたい」という教員の学ぶ心に火を灯すために、県教育委員会と大学とがそれぞれの役割を考え、連携を密にしていくことを今後一層大切にしたい。



「養成」「採用」「研修」の 一体的改革を目指し スタートラインに立つ シンポジスト 新潟市教育委員会学校人事課 課長 池田 浩 様

「ぜひ、育成指標を通して実現したい新潟市の教育、そして教師像を大いに語って下さい。」事前打ち合わせで、小久保先生と川端先生から熱いメッセージをいただきました。

フォーラムでは、育成指標策定の趣旨、内容、活用方法等について説明させていただきました。その中で、職種ごとに指標を作成したこと、新潟市教育ビジョンとの関連性についてなど、新潟市の特長となる点について強

調しました。果たしてお2人の先生方の思いにどれだけ応えることができたのか？については自信ありませんが、新潟大学教職大学院と新潟市教育委員会が連携し、育成指標を基軸として、未来の教育を創造していくのだというビジョンが明確になりました。同時に、今後解決していかなければならない課題も明らかになり、今後も共に考え、語り合い、そして実践していくことが重要であると実感しています。今まさに、「養成」「採用」「研修」の一体的改革を目指しスタートラインに立ったところです。

参加者の声 ～アンケートより～

- ・学生の立場で聞いていても、とても勉強になりました。指標は4年間の大学生活を終えた時の姿も示されており、もっと勉強しなければ思いました。
- ・どのような教師を目指すといいのか、育成指標があることで目標ができます。達成度を診断し助言してくれる方などがいるとありがたいと思いました。

ラウンドテーブル *Round Table*

学校と地域の連携・協働【教育課程編成】

学校経営コース 現職院生2年
高見潤

勤務校における教育課程の在り方について話し合いました。教育活動が「何のために」「何を」「どのように」行うか決められ、それが着実に展開されていました。そして、取り組んだ活動について、分掌上の各部署で定期的に見直したり、さらに重点化を図ったりする等、学び続ける教師集団としての様々な取組が行われていることを共有しました。またPDCAサイクルの中でC（評価）をA（改善）に確実に生かすことや、日常的に地域の人や物とつながり学校と地域が連携しながら取り組むことの重要さにも触れました。

今年度、自分自身5学年の防災教育の計画を「目的」「内容」「方法」の観点で再構成し、学習を進めています。教職大学院での講義を踏まえ、目指す資質・能力を「大震災・避難の心得」の四つの要件に基づいて設定しました。また、大勢のボランティアから連携的支援を受けて学習を進めてきた経緯を説明し、参加者の先生方からも有効性を認めてもらいました。学校と地域の連携・協働は、今後もさらに重要視されると考えます。先生

方との情報交換で、教育課程に関する共通認識を図り、教育を推進する意義を実感することができました。

対話活動を考える【授業づくり】

教育実践コース学部新卒院生1年
月岡千夏

「対話・協働」に焦点を絞りながら授業づくりについての話し合いが行われました。これまでの実習で感じた悩みや課題をお話すると、どのように授業の中に対話活動を取り入れていくか、また児童の対話活動を支えるものは何かというテーマを中心に話し合いが進みました。私のグループには現職の先生が3人いらっしゃってお話を聞かせてくださったのですが、どの先生も児童の“深い学び”に真摯に向き合っており、子ども同士の対話活動をより良いものにしたいという強い思いを感じました。そのような先生方のお話から、子ども同士の考えのズレや前時までの学習とのズレなど、様々な“ズレ”を大切にすることで児童の対話が盛り上がること、また児童同士の対話は支持的な学級風土が土台にあることなどを改めて学ぶことができました。ラウンドテーブルを通して学んだことをこれからの自分の授業づくりに生かしていきたいと思います。

参加して良かった！【生徒指導・教育相談】

三条市教育委員会小中一貫教育推進課
田村和弘

「参加してよかった！」というのが、率直な感想です。

教育行政関係者2名、大学教員1名、小学校教諭1名、養護教諭1名、大学生2名の少人数での話し合いは、とても有意義なものとなりました。いじめや不登校等の生徒指導上の諸問題に対して、リーダーとして対応する管理職としての視点、学問的な見地から理論的なサポートをする研究者としての視点、子どもに寄り添いながら精神面をサポートする養護教諭としての視点、実際に児童生徒に対応する学級担任としての視点、学校や保護者を他機関とつなぐコーディネーターの役割をする教育行政としての視点、学生という立場からの新鮮な視点等、様々な角度から話し合いをすることができ、時間が短く深い学びに到達したとは言えないかもしれませんが、問

題意識の高い（問題に対して主体的な）人たちと対話的な学びができたことに満足感を味わうことができました。

児童の感じ方を大切に【学年・学級経営】

教育実践コース 現職院生 2年
桑野まゆら

目指したい児童の社会的自立の姿とともに学級目標を活かした取組について話をしました。子どものイメージや子どもの言葉をいかに具体化しながらPDCAサイクルを行っていかかが話の中心になりました。学校生活の中でめあてや目標を考えさせることは多くありますが、その目標などに具体性がなければ評価へはつながっていかないことを参加者の経験をもとに再確認することができました。

さらに、振り返る際の児童の感じ方と教師の捉え方のずれについても、話題になりました。担任が感じた児童のがんばりを認めることはもちろん、児童本人が感じているがんばりを認めることの大切さを改めて気づかされました。そのがんばりを知るための具体的な取組なども参加者から聞くことができ、自分の学級の実態に合わせながら即実践できそうなヒントをもらうことができました。

学ぶ喜びを実感【学校経営】

村上市立猿沢小学校教頭
館岡信也(一期生 結絆の会)

私は、この春に新潟大学教職大学院を修了しました。現在は、教頭職を拝命し、校長の指導を仰ぎ、職員に支えられながら地域の未来を切り拓く学校づくりに邁進しています。在学中は、地域連携をテーマに実践研究に取り組みました。

今回は、教職大学院での学びの成果を参加者に伝えたいという思いに駆られ、地域連携に関する話題を提供しました。情報交換の中で、地域のよさや課題に大きな差があることを実感しつつ、中学生の地域貢献や保護者との連携の実践を聞き、新たな可能性を見出すことができました。その新たな可能性から、自校での具体的方策を考え、再度、話題を提供することもできました。その瞬間に、新たな期待感や楽しさを感じたのです。

このことが、教職大学院で身に付けた学び方によって生まれた学ぶ喜びです。これが、現任校で職務を進める際の自分の核になって

います。自分の核を作っていただいた教職大学院の先生方と同期の仲間、現院生に改めて感謝する貴重な一日となりました。

事例を用いた参加型研修会【特別支援教育】

新潟大学教職大学院教授
古田島恵津子

通常学級担任、特別支援学級担任、通常学校管理職、特別支援学校担任、大学教員、大学院生、学部学生、教育委員会指導主事、一般企業の方など、多様な立場の方が参集しました。その中で、「多職種・他機関連携」「早期発見・早期対応」「校内研修」などが話題となりました。

参加したグループでは、特別支援学級増加に伴う初任者研修やその他の研修について紹介しました。その中で印象に残ったのが事例を用いた参加型研修会でした。一人一人が必ず話したり作業をしたりする機会があり相手の話を否定しないで聞き合うことを条件としていました。聞いてもらえる安心感が他の人の話に耳を傾けさせ、自由な雰囲気を作り出し、新たなアイデアを生み出しやすくさせていると感じました。

このラウンドテーブルそのものも安心して話せる場となっていて、互いの実践からそれぞれ学ぶものを得ることができたと思います。今後の研修の在り方として多様な視点を得た時間となりました。

参加者の声 ～アンケートより～

- ・ 4～5人のラウンドテーブル方式は他職種の方とのお話が十分できて、大変参考になりました。今の職場で生かせることを考えてみます。
- ・ 前は授業づくりで参加させていただいたのですが、今回は学級経営に参加し、授業と学級経営は、とも深くつながっているということがよく分かりました。悩みを話すことができて良かったです。
- ・ 私は学生なのですが、様々な特別支援学校の状況を知ることができ、大変勉強になりました。
- ・ 対話について、深く議論ができた。子どもの対話のスキルを高めるためには、教師の「価値付け」等、役割があることに気付いた。2学期からの実践に生かしていきたい。

(写真) ラウンドテーブル風景



特集「授業」

本学教職大学院の授業について紹介します。

共通必修科目

第2領域「学習デザインの理論と実践」

(場所 大学)

担当：小久保美子 高木幸子 一柳智紀
兵藤清一 井口浩

この授業は、学習デザインに関する理論的・実践的知見を基に各教科等の目標・内容を踏まえた単元計画を立てることを目的に、夏期集中講義として行われました。

第一日目は、ドナルド・A・ショーンの『省察的实践とは何か』について、わからなかったことや新たに発見したことを語り合いながら読み込んでいきました。二日目は、各自が構想する単元計画について発表・交流し意見を踏まえて計画の修正を進めると共に、子供の学びと授業との関係などについて教員が講義を行いました。最終日は、模擬授業の実施と協議、省察を行いました。単元構想から模擬授業の実施を通して得た学びを交流する中で実感した子どもの学びを予想する難しさや教材研究の重要性について、自身の言葉で省察的に語る院生の姿が印象的な授業でした。(高木幸子)

・・・参観した教員の声・・・

3日間の集中講義の初日、ドナルド・A・ショーン著『省察的实践とは何か』を読み解く読書会に参加しました。参加者それぞれが気になった文やキーワードを紹介し、質問や感想を重ねました。一人では理解が難しかった内容が徐々に明らかになりました。その中で、「省察」が新たな価値を生み出す行為であるということが理解できました。その後、これを取り入れた授業実践が検討され、模擬授業が行われました。この経験は、「省察」について考え続けるきっかけ作りになっていると強く感じました。

(第6領域 古田島恵津子)

※教職大学院では、ピア・レビューを重視し、どの教員も興味・関心のある科目を各期で一つずつ選び、授業を参観して互いに評価し合っています。



選択科目

「通常学級における特別支援教育の事例研究Ⅰ」

(場所 大学)

担当：長澤正樹 古田島恵津子

この授業は、問題行動を示す児童生徒に対し、応用行動分析による対応の基礎を学ぶことを目的としています。応用行動分析という理論はあまり聞き慣れないかも知れませんが、問題となる行動を禁止するのではなく、望ましい行動をほめて伸ばすという、当たり前のかかわり方を理論化したものです。聴講される院生の方は、ほとんどはじめて学ぶ内容だけに最初は戸惑いもあったと思います。しかし、方法が実用的で子どもの見方が変わった、関わりにくい子への接し方が変わったなどの感想が聞かれました。後期の「事例研究Ⅱ」もあわせて聴講した修了生からは、「環境を変えることで問題が生じにくい学習環境を整える取組」「望ましい行動を増やして問題行動を結果として減らす取組」「本人の意思や思いを大切にしている取組」などの報告がありました。大学院修了後、現場に戻った現職の先生方は、この授業で学んだことを意図的に実施されていることが確認できました。

(長澤正樹)

・・・院生の声・・・

「通常学級にいる児童よりも遅れている子どもへの教育」が特別支援教育だと思っていました。しかし、発達障害に対する知識や体験談の共有、現場の方からの実態談等を通して考えが大きく変化しました。障害の特性に合わせた指導を行うことで、児童の持てる力を引き出せる可能性があることを学び、個人に応じた教育のよさや柔軟性にも気づきました。通常学級でも特別な支援を要する児童が多い中で、この講義で学んだことは必ず生きてくると感じます。

(教育実践コース 野崎亮平)



(左写真2枚) 授業風景

「生涯学習計画立案における学習支援者の実践的課題」

(場所 大学)

担当：相庭和彦 金子淳嗣

本講義は教員の研修計画を立案するためにどのような視点が重要であるかを、実際に計画を立案していくことを通して学習していくことを目的としたものです。研修計画の立案において最も重要なことは、学習者の視点に立つということです。それは研修を受ける教員がどのような学習ニーズを有しているのかを探っていくことがポイントです。

学習ニーズには自覚化されている顕在的ニーズと本人にもよくわからないもやもやした潜在的ニーズがあるのですが、学習者に学習を継続させていくことは、後者の自覚化を進めていくことが何より重要です。そしてまた、そのプロセスは学習者にとって「楽しみ」でなければなりません。

本講義は以上の視点をもとに、研修計画を立案していく方法を検討します。最終回に参加者の全員が自ら作成した計画を発表し、相互に評価を行います。(相庭和彦)

・・・院生の声・・・

授業を受けて学んだことは、私たちが教職員として相手にしている子どもたちは、学習者の中の一部であるということです。普段我々教職員は、目の前の子どもたちの教育や学習を担っています。しかし、生涯学習の視点から見た場合、我々教職員も学習者であると気づきました。大人でも子どもでも、学び続けるためには、学習意欲と学習ニーズが大切だと学びました。大人である我々教職員が学び続ける姿勢が、子どもたちの成長へとつながることを自覚し、研究を続けたいと思います。

(学校経営コース 小出洋介)



【編集後記】

教職大学院発足3年目となりました。本ニュースレターの内容から、本教職大学院と新潟の教育関係者の方々とのつながりが広がり続けていることを強く感じます。この3月に修了生を送り出したこと。年2回のフォーラムの開催。それから、ニュースレターに熱い執筆をくださる大勢の方々の存在。様々な積み重ねの大切さを感じるとともに、この場をお借りして、ご協力くださる皆様方に感謝申し上げます。(中島伸子)

「教育相談事例研究Ⅰ」

(場所 大学)

担当：神村栄一 吉澤克彦

この授業のメインは、履修院生が学校現場で直面してきた事例の検討です。教師が学校で出くわすさまざまなトラブル、子どもの不調のサインをその発生した状況における的確にとらえ、「見立て(解決に向けた理解)」を共有し、連携体制を構築し、計画的な支援介入をその効果を確認しながらすすめます。未然防止、再発防止のためにも次の支援体制に引き継ぎます。このプロセスをより機能的にする知識とスキルを具体的に意見交換します。なお平成30年度は、県内の公立病院で勤務される小児科医、学校や民間の相談室でカウンセラーとして活躍される臨床心理士の方を、それぞれ外部講師にお招きし、事例検討やさまざまな演習をさらに学校現場のリアルに迫る内容にすることができました。

(神村栄一)

・・・院生の声・・・

庄司：教育現場に限らず、医療機関など様々な立場の方の話聞くことで、新しい気づきや対応の仕方など、支援についての幅が広がりました。ストマスが調べた、いじめや不登校の統計資料や事例も大いに刺激になりました。

鈴木：自分が現場で困っている事例についてインシデントプロセスを用いて検討でき、それが翌日すぐに実習先で活かせる、確かな理論的な裏付けがある実践的な授業だと感じました。

(教育実践コース
庄司宗由
鈴木正実)



お知らせ

「いがた教育フォーラム2019 in March」
開催日時：平成31年3月2日(土)
ラウンドテーブル等予定 お待ちしています!

新潟大学教職大学院 News Letter 「協創」 第7号 2018.10.1 発行
編集・発行・印刷
新潟大学大学院教育学研究科教育実践開発専攻(教職大学院)広報部会
〒950-2181 新潟市西区五十嵐二の町 8050
問い合わせ先: kyousyokudaigakuin@ed.niigata-u.ac.jp
ホームページ URL: <http://www.ed.niigata-u.ac.jp/kyousyoku/>
ニュースレター、各種案内等はHPに随時掲載しています。